

十 國語學上に於ける谷川淡齋翁の事蹟

龜田 次郎

一 序論

元和偃武以後、文藝復興につれ、從來久しく、沈衰して居た國語の研究も、俄然勃興しはじめたが、この國語研究の趨勢を挽回して、後日大に隆盛を極めた我國語學の地盤を作つたのは、契沖阿闍梨(二三〇〇—二三六二)である。後賀茂眞淵(二三五七—二四二九)、本居宣長(二三九〇—三四六二)の二大人が出て益斯學を鼓吹せられ、愈その隆盛を來したのである。

今自分が茲に述べようとする谷川淡齋翁も、また國學及び國語學に偉大なる貢獻を與へた人で、而も賀茂、本居二大人の中間に活動して、後世の學者に少なからざる影響を與へた人である。即ち翁は寶永六年(二三六九)二月二十六日に生れ、安永五年(三四三六)十月十日に歿したので、丁度契沖阿闍梨の寂した元祿十四年から八年後、眞淵大人の生れた元祿十年から十二年後に生れ、眞淵大人の歿年明和六年から七年後、宣長大人の歿年享和元年より二十五年前に歿したのである。この谷川翁の享年については清宮秀堅の「古學小傳」下に

安永五年丙申十月十日歿ス。津城ノ傍ラ刑部村福藏寺ニ葬ル、年七十。
と記してあるので、世の學者は、皆これに依據して居るようであるが、今翁の墓碑に刻んである所によると

寶永己丑二月二十六日生安永丙申十月十日終孝子士逸謹建
とあるから、これで見ると、生年は寶永六年に當り、享年六十八となる。それで自分はこの方を探つて「古學小傳」の記載は誤であらうと考へる。序に茲にこの事を述べて置くのである。自分は以下順を追うて、この谷川翁の我國語學上の事蹟について述べよう。

二、語學

翁は伊勢安濃津に生れ、その家は累代醫を業とし、翁の世に至つて家勢益振ひ、夙に力を國典に用ひたのである。この事は後の本居翁と酷似して居つて、而も此兩大人は親交があつたのである。こは面白い事實ではないか。而して翁の語學上の學説は、「日本書紀通證」、「和訓栞」の二部で見ることが出来るのである。「日本書紀通證」は、その題目の示す如くに書紀の註解であるが、國學者としての翁の著述であるにもかかはらず、全部漢文で記されてある。それで翁は嘗に

國學のみならず、漢學にも長ぜられて居たことが明かなのである。最も書紀の本文が漢文であるから、従うて註解もそれに倣はれたのであろう。「古學小傳」下にも

人トナリ氣慨アル人ニテ、史傳ヲ暗通シ、學和漢ヲ兼、好古博洽ヲ以テ稱セラル。最モ心ヲ日本紀ニ潜メ、其行文措辭ノ或ハ儒書ニ取リ、或ハ佛典ニ採ルノ類、皆本ヅク所ヲアゲ、廣ク先哲ノ説ヲ彙集シ、參互檢討シテ日本紀通證三十五卷ヲ作ル。

とある如く全編古今諸家の説を折衷し、且つ紀中の熟字成語は一々經史佛書を引いて其の出據を證明してある。この書卷一には彙言十九條附錄三編があつて本書の大意、傳來の事。神代文字の事、舍人親王傳を記し、卷二から卷七までは、神代卷、卷八から終りの卷三十五までは、神武紀から持統紀までを註解してある。又本書は翁の四十歳の時延享五年戊辰即ち寛延元年(三四〇)三月上旬巳に出來上つて居て漢文の自序がある。其他寶曆二年癸酉(三四一)八月朔奄藝河北景楨、寶曆六年丙子(三四一)夏、權大納言藤原實連卿の序が載つて居る。

本書の刊行は、その脱稿から十四年後の寶曆十二年壬午(三四二)冬であつて

翁の五十四歳の時である。處が、この書卷一に載せてある「倭語通音」は、我國の言語に語尾變化といふ一種靈妙不可思議な活があるといふことを悟つて、この變化を五十音圖に配當して一の活用圖を作つた最初のもので、その圖は左の通りである。

倭語通音

遇 書 指 立 往 言 產 悔 斬 請									
ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ	ラ	ワ
イ	キ	シ	チ	ニ	ヒ	ミ	イ	リ	キ
ウ	ク	ス	ツ	ヌ	フ	ム	ユ	ル	ウ
エ	ケ	セ	テ	ネ	ヘ	メ	エ	レ	エ
ヲ	コ	ソ	ト	ノ	ホ	モ	ヨ	ロ	オ

今按倭語活用
自有音韻次序
今借態藝十字
以發揮其義但
首尾遇請兩韻
取通音非正義
也蓋第五之十
韻皆非雅語故
詠歌讀書古今
不用之是自然
之妙爾

この活用圖は、我語學史上最も注意すべきものの一つである。元來我國語研究は、歌學物興の機運に促されて發達したものであるから、その自然の結果として假名遣又は「手爾遠波」に關係したものは早くから現はれたが、言葉の活き即ち用言の活用に關する研究は、遙か後世に至るまで發達しなかつたのである。天正九年（二二四〇）に初稿が出來、慶長二年（二二五七）に訂正になつた釋應其（二一九五—二二六六）の「無言抄」の中に言葉の活といふことが見えて居るし、契沖（二三〇〇—二三六〇）の「和宇正濫抄」の中にも體用といふ語も見えて居るが、この時代に於けるこれらの用語は、言葉の形體についていつたものではなく、その内容についていつたものであるから、後世、吾々のいふ活用と同一に見ることが出來ないのである。又延寶四年（二三三六）正月に刊行の撰者不詳の「一步」、享保四年（二三七九）に出來た水溪居秀（生歿年月不詳）の「假字遣秘解」等にも見えて居るようなものは、未だ動詞活用について真正に研究したものと見ることは出來ないのである。以上のものは、皆假名遣の上から語尾變化の規則を定めたもので、この變化が文法上に於ける種々の職分を盡すといふことを認識したのではなかつた。然るに、この假名遣の範圍から離れて、我國の言語に語尾變化と云ふ一種

靈妙不可思議な活があるといふことを悟つて、この變化を五十音圖に配當して一の活用圖を作つたのは、この谷川翁が創始者である、この點につきて、翁の語學上の功績は實に顯著なりと云ふべきである。尤もこの活用圖は、翁の後日の著「和訓栞」にも載せてあるが、その初めて出たのはこの「通證」である。尤もこの活用圖は至つて不完全で、且極めて幼稚なもので、今日吾々が見て、大に批難すべき點があるのは勿論であるが、それは創始の業としては、是非もない次第であると思ふ。兎にも角にも、この活用圖創成の功は、決して忘るべからざるものである。

然るに、この「日本書紀通證」が出來上つた寛延元年から二十一年後の明和六年（二四二九）二月に出來た、賀茂真淵大人（二三五七—二四二九）の「語意考」の中にも動詞の活用を、五十音圖に配當して第一音を初、第二音を體、第三音を用、第四音を令、第五音を助と名付けて活用を説明したものが出來た。處が後世の學者の中には、この活用を五十音圖に配當した創始について、谷川翁と賀茂大人との先後を疑ふ者がある。その論者のいふ所は次の通りである。

單に年代からいへば、谷川翁は賀茂大人よりも二十一年早い、元來、「語意

考ははじめ「語意」といつて早くから草稿の儘で傳はつて居たもので、その歿後二十年を経て寛政元年（三四九）夏に漸く刊行せられたのである。加之、谷川翁の著述には、古人先輩の説を採用蒐集した所が多く見えるから、賀茂大人の説が先に世に行はれたのを、後に谷川翁がこれを採用したのであると、然しこの疑は如何であらうか。若しこの論者のいふ如く、谷川翁が賀茂大人の活用圖を見て採用したものとするれば、却つて何故「語意考」に見えて居る有名な延約説をも採用せざりしかが疑はれる。自分は寧ろ、賀茂大人の谷川翁の活用圖を見て、それを「語意考」に敷衍せられたのではなからうかと思ふのである。自分は兩著年代の懸隔、即ち成功、刊行年月の上から見て、谷川翁を以てその創始者と斷ずるのである。世上凡百の事物は、疑へば際限のないものである。丁度この疑問は、於乎所屬辨について、本居大人の「字音假字用格」と富士谷成章翁（二三九八—二四三九）の「脚結抄」とに見えて居るので、其の先後を疑ふのと同じの論と思ふ。

次に翁の語學上の功績は、辭書の完成である。從來辭書の編纂は分類、書引、假名引、語釋、方言、俚諺等種々の方面に涉つて、随分澤山世に公にせられたが、

それも文字の音、若くは音と訓とを記したのか、或はこれに簡単な解釋を添へたもの、又は特に一部の言語を採つて解釋したものか、社會上最も必要な言語及び事物、事實を解釋したものかであつた。猶この外では事物の異名ばかりを集めたもの、又は語源について説明したものであつた。それであるから辭書としての必要な條件が備つて居ない者ばかりで、今日吾々が普通國語辭書として、やゝ完全な體裁を備へるようになったものは、翁の著はされた「和訓栞」が最初のものであると思ふ。この辭書編纂についても、亦翁は大なる功績を挙げられたものといはねばならぬ。この「和訓栞」は「古學小傳」下に

海北若沖が「和訓類林」を擴充し、「和訓栞」をあらはし、古今雅俗の言語を統括す。最有用の書なり。

とあるが、果して然るか否か、自分は決定し兼ねるのである。一體、海北若沖の「和訓類林」は七卷本で、附録に「和訓指掌略」一卷あるが、これは谷川翁の生前四年即ち寶永二年（二三六五）三月に出来上つて居る。これは寫本で世に傳つて居て、刊行本ではない。この書は「日本書紀」をはじめとして、凡二十七部の書につきて「和訓」をあつめたものである。又「詩經」「文選」の如き漢籍の類をもとり、伊呂波順

に連ね、何れにも引用書を舉げてある。又附録の「和訓指掌」には、「日本書紀の訓だけを伊呂波順にあつめ、人名、地名、姓氏等をも収めてあるが、本篇の類林には、これがない。それでこの書を敷衍擴充したか如何かは、わからないのである。」「和訓栞は、兎にも角にも國語辭書の完成した最初のものであることは確な事實である。この「和訓栞」は、何時出來上つたものであるか不明である。本居大人の序文はあるけれども、年月が載つて居ない。全部前、中、後の三篇に分かれて、

前編 四十五卷三十四冊

中編 三十卷三十冊

後編 十八卷十八冊

合計九十三卷八十二冊

ある。随分浩瀚のものである。この書は翁が在世中に出版しかかつたが、その刊行を見ず、歿後に數度に分けて出版せられ、

首卷及び前編一卷より十三卷まで十四冊は、安永六年（二四三七）九月刊

同十四卷より二十八卷まで十冊は、文化二年（二四六五）十二月刊

同二十九卷より四十五卷まで十冊は、文政十三年即ち天保元年（二四九〇）閏三月刊

中編三十卷三十冊は、文久二年（二五二二）二月刊

後編十八卷十八冊は、明治二十年（二五四七）七月刊

となつて居る。即ち翁の歿した翌年から、其の子孫に依つて刊行せられたので、最初の刊行安永六年（二四三七）から、最終の刊行明治二十年（二五四七）まで、百十年もかゝつて居る。斯く全部の刊行刻成に時日を費した事は、昔時印刷術の進歩しない時代に於ては、當然の事とはいへ、随分長い年月を要したもので、其の苦心の程も察せらるのである。本書の成立については、前編の終末に、

此書、士清大人あらはしたまふ處にして、五十音を阿行より佐行まで刊行しあかれしを、士逸大人、父翁の遺稿を本とし、翁の學の友がき季鷹縣主諸共にかうがへ正して、さきに多行より波行までを刊行したまひき。こたび其校正しあかれしを刊行して前編を終る。しかはあれど。言語浩繁なれば、此書に洩しは中編後編つぎつぎ刊行するを待ちて合せ見給ふべし。近頃、をのつらね方違へるよし、本居宣長大人考へ出られしかど、此書もはら先生遺

稿のまゝを刊行するを旨とすれば、本のまゝにつらねあさつ。

文政十一年五月 孫 谷川士行謹記

とあるので明かに知れる。

この和訓栞は、各編五十音順に言語を集めたものであるが、この書の成りし時には、未だ本居大人の「字音假字用格」安永四年（三四三五）正月成、翌五年（三四三六）刊行に載せてある、「於乎所屬辨」も世に知れて居なかつた爲めに、その所屬をあやまつて居るのである。この本居大人の「於乎所屬辨」の成りしは、谷川翁の歿年の一年前で、刊行はその歿年であつたから、これを知らずして居つたのも無理のない事である。而も孫士行の跋にも、この事が記されて斷つてある。前掲の跋にも見えて居る如く、前、中、後と漸々編を重ねて刊行したのであるから、三編各その蒐集の言語に差異がある。前編は 主に古言雅語、中編は全く雅語、後編は、専ら方言俗語を載せてある。殊に後編には蝦夷語や、朝鮮語の外に、南蠻語紅毛語までも編入してある。これで見ると、翁は當時の外國語の一斑に通じて居つたらしう思はれる。又本書の中、この後編は去ぬる明治二十四年（二五五）十月の濃美大震災の折、原板が焼失したから、今日では至つて稀になつ

た。然し明治三十一年（二五五八）に活版の翻刻本が二種公にせられたから、吾々はそれで大に便益を得る様になつた。それは、

井上頼圀、小杉楳邨増補

増補 和訓栞 三冊

上、明治三十一年七月十五日刊

中、同 年十月十五日刊

下、同 年十二月三十一日刊

東京 近藤活版所發行

と、

和訓栞 三冊

一、明治三十一年八月十七日刊

二、同 年十月十一日刊

三、同 三十二年一月十五日刊

美濃 成美堂 三浦源助發行

とである。前者は、原板の前中兩編を取纏めて、五十音順に配列し、下編の分

は全く缺けて見えて居ないが、増補語林が鼈頭に載せてあるから、その缺陷を補ふ事が出来る。後者は原版三編共に取纏めて、矢張五十音順に配列してある。勿論兩者共に於乎の所屬は悉く訂正してある。この兩者の出版當時讀賣新聞紙上で文學士岡田正美氏が比較して其の優劣を論じ、併せて所感を述べられた。さてこの「和訓栞」の原版は、はじめ二字丈五十音順になつて居る。それで未だ十分に脱稿しなかつたものではなからうかと思はれる。よしや脱稿したにしても、未だ十分訂正を終へなかつたものであらう。この書は從來の辭書に比べると、

第一、蒐集した語彙の範圍の頗る廣大なることで、和漢以外の言語をも編入してあること。

第二、解釋の精密なこと。

第三、古典に依據して例證を多く引用せること。

の三點は、確かに優れて居る所であると思ふ。後世出版の辭書類は、殆んど皆その組織體裁をこの書によつたというて可なりである。要するに翁は本邦辭書の完成をなし、その先驅をなしたといふべきものである。

谷川翁の語學上の意見は、この和訓栞の首卷に見えて居るので、音韻、文字、品詞、作歌、語釋、漢字も日本語との關係、古代辭書、漢字の用法、訓義、假名遣、方言、朝鮮語、梵語などあらゆる方面に涉つて、廣く材料を集め、契沖、白石、文雄、眞淵、宣長等の諸大家の所説を採つて、これを網羅し、詳細に論述して有る。唯惜しむべきは、これらの論述が毫も秩序なくたゞ思ひ出づるまゝに、書き連ねてあることである。然しこの諸學者の所説を蒐集網羅してある所は、翁が大に苦心せられた所であらうが、この結果翁自らの創説の少いのは、吾々後進が常に遺憾に思ふ所である。

今吾々がこの書について、注意すべき點が三つある。それは翁の語學上の事蹟についてののみならず、語學史上から見ても忘れてはならぬ事であるから、特に茲に述べて置く。

第一、今日世間に用ひられて居る文語に對する口語といふ術語は、この書に於て初めて用ひられて居る事である。此術語は、後に本居宣長大人の「漢字三音考」(天明五年(一四四五)三月刊)をはじめとして、後世の學者に襲用せられ、延いて現代に及び、廣く一般に使用せられる様になつたのである。

第二、假名引辭書の五十音順は、この「和訓栞」が創始であることである。從來の辭書は、その假名引のものでは、皆いろは順であつたが、この「和訓栞」に於て初めて五十音順に配列したのである。然しその草創のために、前述の如く二字丈が五十音順になつて、三字以下はならなかつたのであらうと思ふ。それでこの「和訓栞」以後に出た假名引辭書では、在來のいろは順を襲用したのと、この五十音順に倣つたのとが並び行はれるやうになつたのである。尤もこの「和訓栞」以前に、寶曆七年（三四一七）六月に出來て、同年刊行せられた賀茂眞淵の「冠辭考」十卷には、其の配列が五十音順になつて居るが、これは元來枕詞の辭書で特種のものである。それで一般普通の國語辭書では、この「和訓栞」が五十音順配列の創始である。自分は讀者にこの點を思ひ混はぬ様に願ふのである。序にここに一寸注意をして置く。兎に角、この「和訓栞」の一般普通國語辭書で五十音順配列創始の事は、我辭書史に於て忘るべからざるものである。

第三、この「和訓栞」の前編は、近世泰西に於ける日本語研究のオーソリチーとなつて、洋人に廣く繙讀せられ、爾後西洋出版の日本文典の標準となつた所の有名な Hoffman (Hoffmann) (西曆一八〇五—一八七八) の「日本文典」(西曆一八六

七出版我慶應三年初刊)に引用せられて居ることである。この文典は同時に英蘭の二國語で出版せられたのであるが、兩者共にその三十八頁に、日本の古言を知る爲めの言語學上の參考として「和名鈔」、「古言梯」、「雅言集覽」、「雅言假字格」とこの「和訓栞」との五種が列舉せられて居る。然しこの中實際文典に材料として引用せられたのは、「和訓栞」丈であつて、他の四種は其書名丈を挙げられたに過ぎない。唯其の員に備はるのみというて可なりである。尤もこの引用せられた「和訓栞」は、書中にも西曆一千八百三十年刊行の分と所々に見えて居るから、前編丈であることは確かな事實である。前にも述べた通り「和訓栞」は、全部を數度に分刊したので、この西曆一千八百三十年は、我天保元年に當つて、而も其の前編丈が全く刊行し終つた時に當るのである。それでこの Hoffman の「日本文典」に引用せられたのは、前編丈であることが確かにわかるのである。當時彼我の交通頻繁ならず、また縦ひ海陸數千里を隔てて居る異域の地なりとはいへ、已に我國語學の典籍は富士谷、本居、東條、中島、鈴木等の諸學者の著述が多く出版せられて居たに拘らず、これ等のものが一つも引用せられずして、只谷川翁の「和訓栞」の説が採られて海外まで紹介せられて居るのは、吾々が特に注目すべき事と思

ふ。尤も、徳川以前、豊臣氏の世に、文祿元年、天草出版の「平家物語拔書」、「エソップ物語」などの翻刻、慶長三年に、辭書の「落葉集」の出版などがあり、又當徳川時代には横島昭武の「和漢音釋書言字考」の翻刻が、天保六年と同十二年と兩度にシーボルト(Siebold)のこのホフマン(Hofmann)とに依つて出版せられたが、語學上の著述に學說として引用せられたのは、この「和訓栞」が始めてである。而もこの「書言字考」和訓栞共に辭書で、その翻刻者も同じホフマンであるのは奇妙ではないか。今日世上に行はれて居る洋人著述の日本語學書には、彼我交通の開けた結果、我語學書の多くが引用せられたけれども、僅か四十有餘年以前に於ては、前記の如き憐れな有様であつたのである。

要するに、谷川翁の語學上の事蹟は、活用圖の創成をなし、辭書編纂の完成を遂げて、後世にその範を垂れ、又廣く學者の所説を網羅して、その精粹を抜き、後の學者をして據る所あらしめた所に在る。而もその所説が遠く海外までも、早く傳播したるは、語學史上特筆すべき點であると考えざる可からず。

三、先輩及び同人との關係

谷川翁の學統は「古學小傳」下に、

ハジメ闇齋派の神道を玉木葦齋ニ學バレ、歌は有栖川職仁親王ノ門人ナリ。

と見え、大川茂雄、南茂樹共編國學者傳記集成に、

松岡玄達及び玉木葦齋を師とし、頗る國學を極む。

と記し、平出鏗二郎氏の翁の傳記には、

淡齋歌道を以て近衛家に伺候し、後に有栖川家に出入せしこと、醫は福井丹波守に受けて、累世これが門人なりしこと、

とあるから、翁は第一神學を山崎闇齋の高弟玉木正英（一三九六）に學ばれたことは明らかな事である。現に谷川家には、

神道許狀

天兒屋命之嫡傳。垂加靈社直授相承之神道。汝篤志克務。是以汝之師文雄。諸傳悉而授口訣畢。汝無親疏之差別。撰器量之輩。宜令傳授此道焉。於老佛之徒者。不可令窺之矣。汝門下。有信實篤志之人。欲授十種神籙之傳。當告文雄。而後授與斯傳。汝宜守誓約之義。以慎而莫怠者也。

享保十七年壬子九月廿七日

玉木正英 刊

谷 川 清 丈

といふ文書も残つて居るのである。この許状を受けた享保十七年(三九六)は翁の廿四歳の時で、京都にも遊學して居つたらしい。文中の「汝之師文雄」とは、何人か不明である。平出氏は、

或は思へらく、葦水草の跋を撰ばれたる松岡文雄にやと思はるれど明ならず。蓋し文雄は葦齋の門人にして、淡齋は當初之に就きて學び、以て葦齋の許状を得しにや。

といはれて居るが、自分には未だ誰であるかは知れぬのである。又翁の神道攻究の時代は享保年間(二三七—三九五)で、寛保寶曆(三四〇—二四二三)の交て盛に門人に傳授せられたらしい。即ち二十歳頃に神道を攻究せられて、三十歳から五十歳までの間に傳授せられた様に思はれる。現に平出氏の説にも、

寛保元年四月朔日松木主禮誓文

寛保二年五月七日日野造酒品幸誓文

寶曆三年十一月二日森内理兵衛定口誓文

寶曆十一年五月二十七日字佐八幡大宮司宇佐公綏誓文

同年同月同日前大宮司從五位上宇佐公古誓文

寶曆二年九月十五日村田元啓有口誓文

安永五年九月廿二日北河倭文眞士明誓文

等があると記されてゐるから、餘程神道にも造詣の有つた事がわかる。加之翁は垂加流の神道家として、森蔭社、振々翁、振々靈社などの靈社號があつたのである。また別に二通の特別な誓文があつて、これについて平出氏は、次の如くいはれて居る。それは、

約 盟

先師奥沖點本説々遂校合。往々今案新説於有之者。以御相談可書添候。尤對先師説對捍私意挿申間敷候。且又末書等書寫致候者。猥に他覽之義停止可致候。依約盟申候處如件。

安永二癸巳年正月十四日

七里勘十郎政要(花押)

七里政要は淡齋の門人なるべく、契沖を先師呼ばはりなすに至りては故あるべし。契沖の點本を校合するに何故に淡齋に斯く誓約せざるべからざるか。

谷川翁

文意を按ずるに、ここに先師といふは、政要の師にあらず、淡齋の師なるかと思はる。余が知るところにては、契沖と淡齋と何等の關係を説きたるものなし。契沖は元禄十四年に寂し、淡齋は寶永六年に生るれば、其間相距ると八年なり。淡齋が契沖を師とすべき理なし。然らば偽文書かといふに、さは思へざれば、これを興味ある問題として後日研究の事とせり。又點本とあるは『萬葉集』にやと思ひしが、そは淡齋が『萬葉集』を攻究せしことあるについての臆測のみ。なほ一通の文書は、左の如し。

誓約之事

一、此度樋口老先生。依商量。秘卷謹而拜見辱畏入存候。誠年來之大望。一家之秘藏。不過之。他洩堅可相守者也。仍而誓紙如件。

寛延二年巳二月

松室大隅重殖

谷川先生座下

此樋口先生といふは、何人にや詳ならず。彼契沖とあるに聯想して、今井似蘭の門人なる樋口主水にあらざるかと思ひしも、秘卷とあるは、却つて神道

上のものならんと思はるれば當らざるべし。

と、以上は氏の所説である。兎にも角にも翁は神學は曲崎垂加流のものを攻究し、上記の如く數多の門下の出來た事は明かな事實である。而もこの神學は其後繼者に傳つたもので、平出氏の傳記に、また次の如く云はれて居る。

淡齋さんが神學でエラクテ、其後が端齋即ち士逸、立齋と神學の方は三代續いて學統が絶え、其の後は醫者を重にしましたので、神學の方には心懸が少なく、……

と、次に翁は醫業の家に生れたが、其の醫學は福井丹波守に受け、國學は松岡玄達（二四〇六）、玉木葦齋を師とし、歌道は有栖川家より受け、近衛家へも出入した様である。然しこれらの學の傳統は如何であつたか、詳しくは知れないがその子孫の繼承した外に、多くの門下生のあつたことは勿論である。それは、淡齋さんは實にえらかつたといふことで、其頃に伊勢の淡齋といはゞ、世間に知れ渡つて居ましたようで、自分には大名から抱へに來ても、大名の扶持を戴くと學問も十分に出來ず、議論も枉げねばならぬとて、一生涯仕へられず。但藤堂さんから、十五人扶持程貰つて客分のやうになつて居たと申すこ

とて、その爲め御家中にも門人が多かつたとのこと、藤堂様高朗（津藩主）も遊びにお出でになり、「淡齋の齡百歳に似たり」とて、「夜話しや寝ながら文の友千鳥と下さつたと申します。又一身田（高田寺）へも講釋に參られたといふことに聞き傳へて居ます（言語學雜誌第二卷第一號平山氏傳記）。曾て搢紳家の招に應じ、藤堂侯も數々其家を訪はれしと云（古學小傳）。

とある如くに、貴族社會にも交り教を垂れた事もある様である。この外、交友としては、反古冢の祥瑞を祝した僧德齡や、「題谷川淡齋瘞稿圖」をかいた度會光隆などと、交際のあつた事はいふまでもない。反古冢の事は、後に述べてあるから、茲には只これ丈をいつて置く。又翁は本居宣長大人与親交があつたのである。前にも記した如く、谷川翁は、寶永六年（二三六九）に生れ、安永五年（二四三六）に歿したのである。本居大人は享保十五年（二三九〇）に生れ、享和元年（二四六〇）に歿せられたので、兩者の間に、生年は二十一年、歿年は二十五年の差がある。それで本居大人は、谷川翁より餘程後進である。この先輩の谷川翁と後進の本居大人とは非常に交篤かつたので、「日本教育史資料」四にも、又與本居諸人親善。平生互有所往復討論云。

と見え、又翁の著述に太人が序文を書いて居るのでもわかるのである。然らば、この兩者の交際は、何時頃からはじまつたかといふに、それは明和二年（二四二五）八月からの事であるらしい。即ち同月に本居大人から送つた書がある、その書の初に、

飯高本居宣長。啓安濃谷川先生足下。先生筆研無恙。僕嘗在京師。聞先生高名也竊嚮慕者多年矣。乃歸鄉里。則欲奉刺就見焉。而塵事冗忙不果到于今。謹茲修尺一。介草深氏。敢致諸左右。聊以布鄙懷。伏乞。勿以俚言擲之。

とあるから、本居大人は京師在學時代から翁の高名を聞いて居つて、交を求めゝる念が厚かつたが、茲に至つて初めて書を致したと見える。この明和二年は谷川翁五十七歳で、歿年の前十一年で、その晩年に近いが、本居大人は三十六歳で、その在世の央であるから、壯年時代である。文中の紹介者草深氏は、本居大人の岳父草深玄弘翁であらう。それで兩者の交際は、これから僅か十一年間であつたにせよ、國學の大家本居大人をして辭を低うして、交誼を求めしめた所を見ると、前掲平出氏の文にも在る如く、谷川翁が當時博識を以て、名を天下に轟かせて居たことが想像せられるのである。爾後互に交通面談大に親善な

りしことは、今日本居家に存して居る兩者の往復の文書でも能く知れるのである。本居大人の「古事記傳」、谷川翁の「和訓栞」に關して、互に意見を徴した事がその文書で明に知られるのである。現に近頃發見せられて、鈴屋保存會の所藏となつた、本居大人の谷川翁へ送つた文書には、「和訓栞」につきて詳しく批評した手紙がある。これは當に兩人の交際の篤かつたことがわかるのみならず、又語學史上に於ても貴重な資料である。

谷川本居兩人共に、伊勢に生れて同じく刀圭を業とし、居住地も一は安濃津、一は松阪で、僅か五里の距離しかない。而も語學に於ては、一は動詞活用圖を創成し、辭書を編纂してこれを完成し、一は於乎所屬を訂正し、手爾遠波を研究して係結法を完成し、共に範を後世に垂れたことが一致する。加之史學に於ても、共に浩瀚の著述をなし、一は「日本書紀通證」を著し、一は「古事記傳」を著して紀記の註解を物し、後世學者をしてこれに則らしむるに至つたのも、亦同一である。要するに、生地、職業、學說、著述の諸點に於て同一であるのは、何んといふ對照ではないか。

以上は、谷川翁の學統及び交友の事であるが、その學說について、先輩との

關係は如何であるかといふに、前にも述べた如く、谷川翁の語學は固より、史學に於てもその先哲の所説を廣く蒐集網羅したのであるから、著述の中に見えて居る翁の所論には、契沖（二三〇〇—二三六〇）の「和字正濫抄」、新井白石（二三一七—二三八五）の「東雅」、僧文雄（二三六〇—二四二三）の「和字大觀抄」や、賀茂真淵（二三五七—二四二九）の所説を引用して有る所が多い。然らば、これら諸先輩との交際の有無は如何かといふに、契沖は翁の生前八年に寂して居るから、交際の無かつたのは勿論であるが、白石、文雄、真淵の三人は、皆翁の在世中の人である。然し、この三人と交誼を結んだ事は今日不明である。翁は只これら諸先輩の著書を読んで、その説を採用したに止まつて、毫も交が無かつたものと、自分は考へるのである。而もこれら三先輩とは、居住地を異にして居て、餘程距離も隔つてゐるから、當時交通不便の世には全く關係がなかつたのであらう。

四 餘 論

「古學小傳」下に

晩ニ著書ノ稿ヲ石櫃ニ入レ埋メ、反古塚ト云。

とある如く、翁は晩年にその二大著述「日本紀通證」「和訓栞」の草稿を地下に埋め

られたのである。この冢は、今も翁の墓碑のある津城の傍、刑部村福藏寺の門前右側古勢子神社の傍にあつて、疎末な自然石に、表に「反古冢」の三字を刻み、背に

何故爾、碎伎志身曾登、人間婆、其禮登答牟、日本玉之譬。

安永四年乙未五月

谷川士清 建之

とある。安永四年は翁の歿前二年である。又僧徳嚴がこの反古塚の祥瑞を祝した文も今現存する。それは、

淡齋谷川翁。曾著證榮二書。草稿故紙堆案。今茲乙未之夏。盛之石國。埋某寺側。建碑銘反古冢。頻有祥瑞。近衛殿下。及邑侯降賜賀詞。時彥贈詩寄國詠賀焉。予亦倣襲事□于詩。其艸奏功故紙堆。寺邊冢□□開。靈蟲三日蛰碑碣。□鶴一時舞屋臺。山海呈祥□與□。都邑賀侯還□。與由神威搖天地。彰灼八□□宙才。

寓徑峰山金剛教寺苾芻素眞徳嚴敬書

とある。又「日本教育史資料」四にも、度會光隆の書いた

題谷川淡齋瘞稿圖

洞津齋先生。嘗里社傍。營反古冢。以所著印本書紀通證、倭訓榮等稿冊若干紙。藏諸石櫃。瘞而立碑。永貽于不朽云。古人冢於文。冢於筆類矣。冢就鐫碑之刻。有吉丁蟲。三日聯接而出。通雅所載。綠金蟬者。彼境未曾有也。以爲奇焉。頃之有獲靈芝。其色黃丹。煜暉若金。莖端著花。薤々然。衆彌以爲祥矣。蓋天眷斯鴻業。靈貺交映。孰謂非福應哉。門生詠倭歌上壽。四方傳響而賀。予亦倣襲。綴歌詞。抒慶抃之誠。遂命畫工。摸新圖。題詩于圖首。以代奉觴。其歌曰。絳珠玉兮茲靈丘。樽杌韞兮字府留。帶礪河山誓不休。日月揭碑□其傾。祥蟲盼蠶金爲衣。冥鑒竭來感相依。又粵三秀揭芳菲。載啓瑞圖符德機。飲朝露兮振羽。競秋光兮呈輝。先生熙兮觴酌。怡顏優兮仙藥。眉壽祉兮貌綽約。萬斯年兮保天爵。

安永乙未晚秋

朝議郎度會光隆印

とあり、尙現に翁と本居大人との往復文書の中にも、

先日、の御報相達申候爾來御清福御座候哉承度奉存候扱て拙者此迄所作ノ「日本書紀通證」倭訓榮等埋メ申候而上ニ反古冢ト記シ碑建申候此所氏神古世子明神ノ社地ニ而候五月末ノ事ニ而御座候此碑出來之砌玉むし三日出申候右之明神

ノ接地ニ候處福藏寺ト申禪寺ニ而即内庭に而碑ヲ刻申候跡に三日續而玉むし入申候玉むしハ當地津邊には曾無御座者ニ御座候手前ニ養置候處十五六日過候而終候右玉むしは榎を好候由其翌日榎葺をもらひ又榎ニはえ候猿腰掛を山中ノ者持参いたし候旁以有故事に御座候右反古塚に辭世の心持に而碑陰ニ何ゆゑに碎きし身そと人とはば

それと答ん日本玉しひ

右ノ歌に由候事に候哉又ハ勾玉考草稿も埋申候へハ因是候事にも被存候右ノ様子ニ御座候間古體新體何成とも一首成被下候様ニ頼奉存候右得御意度如斯御座候御門人ニ而も外ニ詠候人御座候ハ、是亦御頼申度候詩ニ而も能御座候已上

八月廿七日

谷川淡齋

本居舜庵様

用事

又

玉むしハ本草ニ出候吉丁虫ト物産家ニ申候四季物語ニ幸ある虫ト申候外見

當り不申候何ぞ御見出候ハ、思召又被仰聞可被下候源平戰ニ日ノ丸ノ扇子ヲ持出候女ノ名玉むし姫ニ而御座候猶古事記傳出來被成候ハ、御見セ被下度候

とある。これらの文を對照して見ると、反古冢の由來や、祥瑞の事など、明らかに知ることが出来るのである。

次に翁の生地安濃津の事を、洞津と記すことである。現に翁の著述にも見え、後人の書いたものにも多く見えるのである。これは何故にかく記すのであるか。翁と本居大人との往復文の中にも、

洞津ハ武備志ニ見エタレト意フニ我邦ノ人アノ、ツト云シヲ彼コノ人アナノツト聞シカ又アノヲアナト云シコト太平記ニ見エタレバ此邦ノ人ノ云シニヨリタル事ト覺ユ

とある。今自分が調べ得た一二の材料では、

明の茅元儀の「武備志」二百三十一占度載度四十二、四夷九に、

日本考

津要

國有三津。皆商舶所聚通海之江也。西海道有坊津薩摩州所屬。花旭塔津筑前州所屬。洞津伊勢州所屬。三津惟坊津爲總路。客船往返必由。花旭塔津爲中津。地方廣濶人煙湊集。中國海商無不聚此。地有松林方長十里名十里有百里。松土名法哥煞機。乃廂先也。有一街。名大唐街。唐人留彼相傳。今盡爲倭也。洞津爲末津。地方又遠與山城相近。貨物或備或缺。惟中津無不有。貿易用銀金銅錢。憑經紀名曰乃隔依理。云々。

と見えて居るが翁の言の如くこれが初めてあらう。又我邦のものでは伊勢の案岡親毅(二四一八—二四八八)の「五鈴遺響」に、

安濃津は滄海の瀕に在り、江山の産物を交易し、諸州の船を維く。明國の書武備志に洞津と録せり。豪商富民多し。其市坊は良位に塔世川を限り、巽位は岩田川を限り、凡て南北三十町餘、民屋二千五百餘戸、産物は綴子布、方俗に津綴子と稱す。

と記してある。これは吉田東伍氏の「大日本地名辭書」伊勢の部にも引用してある。それで自分の考へる所では、翁の往復文中にもある如く、其初め明人がアノツをアナツと聞き誤つて、洞津の二字を當てて用ひたのを、後に邦人がこれを襲

用したものであらうと思ふ。徳川時代は漢學が隆えて斯學者が何事も彼に倣つた世であるから、これも亦その一例であらう。それで谷川翁もこれに據られたものである。

以上反古冢の事や洞津の由來は、谷川翁の語學上の事蹟ではないが、聊翁の著述に關係して居る事であるから、茲に餘論として記して置いたのである。

五 結 論

これまで述べた所で、谷川翁の語學上の事蹟は大略明かとなつたであらう。翁は動詞活用圖を創成し、辭書の完成を遂げ、後世の學者に依據する所あらしめ、又廣く世の學者の所説を網羅して、其精粹を抜いて學界に偉大なる貢獻を與へたのである。又その學説が遠く異域の學者に傳播した事は、我語學史上忘れてはならぬ所である。而も翁と親交のあつた國學の大家本居大人をして、後日斯學に一大時期を劃する事業を遂げしめたのも、多少翁の影響があつたものと思ふのである。語を換へていへば翁は本居大人の先驅をなしたものである。可なりである。本居大人が翁の著「和訓栞」に序して「翁を言靈の先導者として暗に猿田彦神に比した」のは至言である。同じ伊勢の地に相先後して、職業、學説、

著述と同一なこの二大學者の出たといふことは、語學史上大に注意すべき所である。然し何事も古人崇拜で長短共にこれを墨守遵奉するのが、本邦學者の通弊の一であるが、この二大人の著述學說に於ても、多少缺點や遺漏のあるものにも拘らず、それが今日尙その儘、斯學の學者に襲用せられて居るのは、吾々の大に憾とする所である。先哲の長を採り短を補ふのが、後進の先輩に對する責任で、同時に任務であると信ずる。古人の糟粕を嘗めてばかり居ては、學術の進歩は決して望まれないのである。(明治四十四年二月二十日稿)

○河北景植より岡藤左衛門宛書簡

(前略)又申上り、和訓栞當分すり、方無之候跡より出來次第進可申上り由直段は十三冊にて三拾壹々之由頃日谷川氏見え被申上り、若急に御覽被成度いは、拙者方分候を進可申候手前には當分無之候而も不苦候間、可被仰聞候 以上

十 藏

藤左衛門様

明治四十四年十一月廿七日印刷
明治四十四年十一月三十日發行

谷川士清先生傳奧附

定價 金壹圓八拾錢

谷川士清先生事蹟表彰會編纂

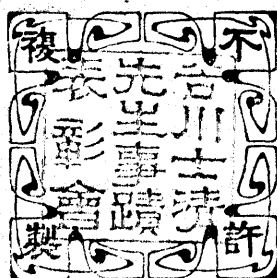
發行兼印刷者

東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地

大日本圖書株式會社

右代表者

專務取締役 宮川保全



發行所

東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地

大日本圖書株式會社

郵便振替貯金口座東京二一九番

各府縣下特約販賣所